

「メルハバ！！ービンギョル地震 2003・5 No3」

被災地ビンギョル入りした佐々木さんからのレポートをご紹介します。また、デリンジェ市でも支援の輪が広がりつつあるとのこと。

ビンギョルから その1(5月4日)

朝9時30分 ようやくタクシーを確保して出発、ディアルバクル郊外は緩やかな起伏の麦畑が続く。ビンゴルまで160km、草原の向こうに雪山が見える。途中3カ所の検問所でパスポート検査。「日本からの友人ですね」と確認してくれる。我々に関する通達が行き届いているのは間違いない。有り難いが、注意しなければ・・

対向車のほとんど無い道路を1時間も進むと、乾燥した峠道。羊・牛・七面鳥・低い木の梢にコウノトリ、休暇をのんびり過ごすには格好の風景なのだが。

2時間あまりでビンゴル市街に到着。まずは敬意を表して軍の司令部に。我々のために腐心してくれた兵隊さん、アルペル（オーちゃん弟）の友人が同乗してくれる。地元の地理に詳しく情報通でもあり助かる。何より有り難かったのは、我々を接待するために無期限外出許可を受けての私服での行動だったことだ。倒壊した寄宿舍の救援活動に参加したときの様子や、報道されることは無いが今も続くゲリラとの戦闘のことなど話してくれた。

○倒壊した寄宿舍へ

報道では「寄宿舍」とされているが、正確には寄宿舍のある学校。今回確認されている死者167名のうち100名あまりが亡くなった場所だ。

校舎・管理棟と寄宿舍の3棟が敷地内にあり、管理棟以外の建物が倒壊した。深夜の地震だったため、寄宿舍にいた197人が被害を受けたのだ。ビンゴル市街から約10kmの郊外の村のなかにその学校はあって、近隣の小さな村の小中学生が寄宿舍で生活を共にしながら学んでいる国営の学校で、費用は国が負担している。従って、ビンゴル市内の生活の厳しい家庭からもかなりの人数がここで寝起きしていたとのこと。・・・災害は確実に弱者を痛めつける。

ざっと見て50人以上の兵隊が小銃を携えて並んでいる。そのむこうがわに倒壊した建物だ間違いなく異様な災害現場だ。今も7人が生き埋めになっているだろう寄宿舍は、解体がほぼ終わり救助隊も為す術が無い様子で座り込んだりしている。オレンジ色の制服を着た、民間救援隊が目につく、アンカラ・ヤロワの都市からのチームを確認できた。

現地の様子の、動画と写真を公開してあります。下記のURLを参照してみてください。

動画

http://pub.idisk-just.com/fview/pOREaMvzQ-q_TRn9Vowk8s8GHpqiIplw-OIlogyrsI4k-QNEhMmLUTKogI4MeUT6ieII_aBHcX4

写真

<http://pub.idisk-just.com/fview/f53KGvyHEM6rPFs5K2GWVcaAV-TgiKuCQsNhTXIXJzeJTovrKbjhSC4DQ7Hug1gX>

○道路が割れている

チグリス川の谷間の斜面に作られた林道の中央部分に亀裂が走っている。テレビが面白く取り上げて、地震による断層だ・・・なぞと放送されたので見に行ったが、崖にしっかり根付いた樹木が崩落を防いでくれて、数kmにわたって亀裂の入った道路になったわけだ。コンクリートで固めた斜面なら間違いなく道路ごと消え失せてしまっていただろう。

○チャイ飲み場は情報収集の基本

遅い昼食のあと、市内のチャイ屋さんにお腹をすかす。男たちがこちらに興味を向ける。「日本のK O B Eから様子を見に来た」と告げるとたちまちに話の輪が広がる。

「テントが足りない」「いや、80人の村が120のテントを持っていったりするからだ」「地震で死なないためにはどうしたらいいんだ？教えてくれ」「立派なテント村つくったけど、家を離れるのは火事場泥棒が怖くてできない」「この街の復興には最低10年かかる」「30年前の地震からやっと立ち直ったばかりなのに・・・」

際限なく話は続く、ここにいる男たちの大半は数日前には「暴徒」としてTVの画面に映っていたに違いない。チャイをおごってくれた彼らには、明日また会おうそのときは私がおごるから・・・と伝えた。握手と汗くさい抱擁で別れた。

○市長のところに行くか？

市役所へ向かう公園に生活臭のないテントが数張りある、近づくと救援チームのもののような。10人ほどの青年が目につく、話しかける。各地の大学生の団体(TOG)で、30人以上が駆けつけたが、何をしたらいいのか、県や市からの指示が的確でないので何もできない、自分たちで何かをしようとするがコーディネートの経験者がいないのでどうしようもない・・・と、泣き言を並べられた。しっかりした若者たちで繋がる力と冷静に自己分析をできるチームだ。意見交換をしていたら、周りに人垣ができる。すぐ向かい側が「危機管理センター」のテントでそこに市長がいるから会ってくれと職員が告げる。

帰りの時間があるの(何せ暗くなると生命の保証の無いゲリラの道だ)で今日は失礼することにする。明日、市長さんには正式に(情報をもう少し仕入れて)面会だ。

■募金について

募金にご協力して頂ける方は、下記の郵便振替口座にて、通信欄に「トルコ地震」と明記してください。なお募金全体の15%を上限として事務局運営・管理費に充当させていただきます。ご寄付を頂いた方のお名前は随時、同NEWSでご紹介させていただきます。

口座番号:00930-0-330579

加入者名:海外災害援助市民センター

*通信欄に「トルコ地震」と明記してください。